旭川医科大学研究フォーラム10　：132～135，2009

学生のページ

第５回世界水フォーラムおよび第４回世界ユース水フォーラムに参加にして

佐藤裕基* 小松智彦** 湯谷啓明***
井上　葵**** 今泉里美***** 青江翔太郎******

１．はじめに

世界水フォーラムは世界水会議（World Water Council）の主催によって３年に一度開催される。1997年３月にマラケシュ（モロッコ）で第１回世界水フォーラムが開催されて以来、2009年３月にイスタンブール（トルコ）で第５回目の開催を迎えた。世界水フォーラムは、閣僚級会議が開催されるメインフォーラム、大学生や20歳代の若者が参加するユースフォーラム（Youth World Water Forum）、10歳代の中高生が参加する子どもフォーラム（Children's World Water Forum）、そして各国から「水」に関連する事業をおこなっている企業や研究機関によって開催されるExpoの４部門から成り、相互に連携を取りながら、このフォーラム全体を一つの方向へと導いていくのが特徴である。世界水フォーラム全体の開催目的としては、「政治的課題としての水の重要性の啓発」、「国際的水問題解決へむけての議論」、「具体的な対策の締結とその受容性に対する世界的な意識喚起」があげられる。

ユースフォーラムは2000年３月に第２回世界水フォーラム（於：ハーグ、オランダ）の中で初めて開催され、今回、第５回世界水フォーラム内のプログラムとして第４回目の世界ユース水フォーラムが開催された。第４回世界ユース水フォーラムは、上記の水フォーラム全体の開催目的をユースのレベルで論じるという目的に加え、将来にわたって水問題を解決するためには、現代の「若者」を育成することが重要な課題であるとの認識が根底にある。筆者らは、2009年３月16日から22日（現地時間）にイスタンブールにて開催された、第４回世界ユース水フォーラム（以下、本ユース水フォーラムと記述）に参加し、各国の人々と交流を深めた。今回のユース水フォーラムでは、25カ国から約150名の若者が参加し、各国における水問題の現状や問題点、そしてそれらを解決するためのリソースや方策について議論を重ねた。筆者らは、各小テーマのディスカッション、および宣言文の作成に関わり、多くの成果を得た。以下に、これらの成果を各テーマごとに記述すると共に、本フォーラムの反省点と水問題解決に係わる将来像を考察する。

（なお、本稿で紹介する宣言文については
http://www.worldwaterforum5.org/index.php?id=1870&L=025
からダウンロードできます。）

２．各テーマ構成と要素

第５回世界水フォーラムでは、主に６つのテーマに応じて議論が進められた。本ユース水フォーラムでも、これにならい、メインフォーラムと同じテーマを用いて、分科会（Thematic Sessions）形式で会議が行われ、宣言文が作成された。また、これと平行して、Action Plan Teamが設けられ、フォーラム期間中、期間後の具体的なアクション（行動計画）を定める分科会として設定された。

2-1.【Theme1: “Global Changes and Risk Management”】

初めの３日間は、メンバーが手分けして、Theme1のテーマに関連するセッションに参加したり、各国の企業、政府関係機関が出展しているブースを見学し、

*旭川医科大学　医学部　**北海道大学　工学部　***京都大学　農学部　****立命館大学　国際関係学部
*****立命館大学　文学部　******北海道大学　理学部

情報収集を行った。そしてTheme1のCoordinator（Bart Devos. Belgium.）の作成した原案をもとにメンバー全員で不足しているところを補いながら、宣言文の基礎を作った。宣言文については“ユースらしい”ものとして「雨水の権利」というものを盛り込めたことが大きな成果だったように思う。

「雨水の権利」というのは「現在起こりつつある気候変動の影響を防ぐためには、森林-河川-海-雨水といった水の循環系が成り立っていることが大切である。そして、その循環のはじまりは雨水なのではないだろうか。ならば、私たちはその雨水をしっかりと地中にしみ込ませる努力をしよう。」というアイディアである。このような「権利」を提唱できたことはユースならではの大きな成果だったと思う。

2-2.【Theme2: “Advancing Human Development and the MDGs*”】

（* Millennium Development Goals）

6テーマの中で、最も生死と直結する深刻な問題だった。問題が大きい分、宣言文は過度に客観的で、「～すべきだ」といった要求ばかりになりがちだった。しかし、全体セッション（6テーマ合同会議）でそのことを指摘されたため、自分たちが水問題を解決していくのだという観点を取り入れた宣言文に仕上げた。注目すべき点は「水は人権」ということと、「教育の重要性」について触れている点である。きれいな水は生きるために不可欠のものだという認識から、ユースの宣言文の中に「水は人権であり、それを保証する法律が作られるべきだ」という文言がとり入れられた。

↑＜Theme1のThematic Sessionの様子＞

この表現が宣言文の中にうたわれたのは画期的である。正しい水の使い方や衛生の知識を提供することで、水問題に苦しむひとびとの生活改善に寄与できる。中でもユースは、若々しい感性を持ち、子ども達にとって親近感があるため、特に大きな役割を果たすことができる。水教育への言及は、ユースが水問題解決のために行動していくという姿勢のあらわれだと考える。

2-3.【Theme3: “Managing and protecting water resources and their supply systems to meet human and environmental needs”】

Theme3では国際的な河川の問題について議論の中でふれた。宣言文中の「現在深刻化している環境問題において、最も被害を受けるのは、私達若者である。だからこそ、若者が自分自身や自分の子供たちの為に立ち上がらなくてはならない。」という部分に議論が集中し、具体的なAction Planとして、定年退職などで現場から離れた先進国のエンジニア達と若い技術者の卵をマッチングする「技術者の育成プログラム」や、良いプロジェクトを推進しているが人員不足の団体／やる気はあるがどんな団体のプロジェクトに参加するのが良いか迷っている若者／資金はあるが投資先の情報がない団体（個人）の三者を結びつけ、より効果的な人・物・資金の流れができるようにするための「インターネットを活用した世界的なデータベースの作成」などを話し合った。

2-4.【Theme4: “Governance and Management”】

Theme4は水資源の統治と管理についてであった。

英語の細かなニュアンスについての話が多く、日本からの参加者の貢献度は低いものになってしまったように感じた。また、メンバーの入れ替わりが激しく終始ほとんど2、3人で作業をおこなうような状態であった。宣言文の内容は、ユースの水に関する会議などへの参加や学校での教育プロジェクトの改善などを推進する内容が主であった。

2-5.【Theme5: “Finance”】

Theme5では金融について話し合われた。ユースにとっては、難しいテーマであったが「金融危機によってユースや子供達は悪影響を受けるべきではない」など、ユースとしての主張を明確にすることができたと

考える。特に、2008年～2009年初頭にかけて世界的な経済危機が訪れたため、タイムリーなテーマとして、関心が持たれた。

2-6.【Theme6：“Education, Knowledge and Capacity Development”】

Theme6 の Coordinator は、テーマに関するトピックを事前に用意していた。Theme6 の中で、主に話す言語を中心にチーム分けをした。各チームに３～４のトピックを与えて話し合い、宣言文に入れるための文章を作った。

筆者らのチームは日本人２人にベルギー人の１人が加わり、与えられたトピックは、「no access to water, no access to education」、「recognition youth as stakeholder」などを含めた４トピックであった。議論の後、チームごとに宣言文の下書きを作り Coordinator に提出した。各チームから集まってきた宣言文の下書きを Coordinator の２人がまとめて宣言文の形にしていた。

最終的には冒頭文に “Education is Crucial” という文言が入ったとはいえ、宣言文への貢献度は決して高くなく、課題を残す結果となった。

2-7.【Action Plan Team: Youth Taking Action】

アクションプランチームは多くの人の多様な興味をまとめることに苦慮しつつも、ユースにできることをブレインストーミングした。結果、「ユースのネットワーキング」、「ユースに注目を集める」、「ユースのアクションプラン」という３つができた。このチームの議論から、ユースのネットワークの設立に向けた動きが生まれた。宣言文の最後に Youth Taking Action というタイトルで、ユースがより活動的に行動するという決意が書かれている。しかし、具体的な行動計画ではなく、やや抽象的な文言に終始してしまった点が残念である。

３．他世代との連携

第５回世界水フォーラムでは、他世代／他セッションとの連携が図られたことも一つの大きな特徴であったといえる。例えば、ユースの宣言文は、メインフォーラムの場で発表する機会が与えられた。また、Expo 関係者や他の会議の参加者とディスカッションする機会も数多くあった。特に10代の参加者が大半を占める Children's World Water Forum では、本ユースフォーラム参加者数名がオブザーバーとして参加しており、また、開催時期が前後していたことから、ユースフォーラムとの連携が図られた。筆者らは、この Children's World Water Forum の Wrap-up session である “Children's Activities of Water”（主催：Project WET Japan. 後援：河川環境管理財団、日本水フォーラム、WET International）に参加するなど、世代間交流にも加わる事ができた。この点でも、「連続性・継続性を持った世界水フォーラム」の実現に大きく近づいたといえよう。

４．日本独自の取り組み

本ユースフォーラムの中で、筆者らは、いくつかの取り組みを試みた。一つは、参加者にアンケートを実施し、「一番水が貧しいと思う場所はどこか。」、「一番水が豊かだと思う場所はどこか。」を世界地図上にマークしてもらうという試みであった。結果、「水が貧しいところ」という問いには、多くがインドに集中し、他にもアフリカなどが挙げられた。一方で、東南アジアは、マークの数が少ない結果となった。これ以外に、文章で水教育に関する聞き取り調査などを実施した。水教育に関しては、「必要」とする回答がほぼ100％であったが、各参加者ごとにその教育に対する姿勢や熱意・スタンスは、ばらばらであるとの印象を受けた。

５．最 後 に

本ユース水フォーラムでは、数多くの新しい取り組み、新しい切り口からのディスカッションが行われ、一定の成果を上げることが出来た。しかしながら、それらが必ずしも普遍的な意味を持つものではなく、また地域的問題に直接的な解決の方策を与えるものではなかった。

宣言文作成において、日本の果した役割は少なくなかったといえるが、新たな視点を与えるほどの貢献がなかった点も反省点である。しかし、将来にわたる Global な水問題の解決にあたっては、過去日本が経験してきたような、河川開発問題や水に係わる公害問題を避けて通ることはできず、日本の過去の経験を生かす機会としても、今後の水フォーラムに期待したい。

国際的な視点から論じると、最近の環境問題への関

心の高まり、特に欧米の着実な進歩が、今回のフォーラムでもみてとれた。この動きに対し、日本がユースとして、またフォーラム全体で、その進歩をリードする存在であり続けることを望みたい。

Theme6 や Youth Taking Action で論じられたように、教育は今や水に係わる分野のみならず、幅広い分野でその重要性が再認識されつつある。政治的な関係を抜きに対等の立場で議論し合う能力、プレゼンテーション能力は、グローバリゼーションの昨今において、重要な資質の一つである。それらを養う意味でも、国際的会議に若年者が参加する意味は非常に大きいといえるだろう。たしかに、参加者らは、若いゆえに未熟であり、考えの及ばない部分が多くあることは否定できない。しかし、そこから生まれる経験知は、参加者らの将来に資する部分が豊富で、社会的にも利益が大きいと推測される。そのような観点からも、このような次世代を担う者に対する会議のさらなる発展と開拓が望まれる。

＜謝辞＞

世界ユース水フォーラム開催および参加にあたり、森喜朗会長をはじめとする日本水フォーラムの皆様、河川環境管理財団および子どもの水辺サポートセンターの皆様、そして関係各機関の皆様に深くお礼を申し上げます。

↑＜メインフォーラムでの宣言文の発表＞